

蝶花板名歌鳩臺

二〇

小坂部館の段

〔解説〕寛政六年七月十五日から道頓堀大西芝居（座本豊竹榮次郎）で興行。作者若竹笛舁・中村魚眼。

敵味方と別れた武家の棟梁眞柴久吉と周防の國主大内義廣との仲を和解すべき勅命を受けた兩家の重臣加藤正清と出海左衛門宗貞とは義兄弟であつたが、共にその妻の父に當る日本無雙の軍略家たる安藝の小坂部兵部晋近を味方として事件を有利に解決しようとの心底を有ちながらも、體面上共に義として妻を離別して翌舅の縁を切つた事とした上に、各其の子を使者として晋近を父への味方にと一命をかけて勧誘させる。晋近は義理ある孫の笹市（清正の子）には名刀、實の孫の松太郎（宗貞の子）には刃引の鈍刀を與へて眞劍勝負をさせ、その間に自刃して身の立場を明かにするといふ八冊目を以て全篇の山として五段十一冊から成つてゐる。本曲では大内義廣は島津義弘、小坂部晋近は長曾我部元親をモデルとして、太閤記を種として夢幻的に想を構へ、眞柴大内兩家和睦して、源氏系統の大内義弘が、平家末流の小田家の姫君春姫と婚禮をするので、外題の角書に「翠君は源家の類葉、嫁君は平家の落人」と置き、又作中に「男女別あり夫婦有る、かためは雌雄の蝶花形、相生祝ふ島臺や」とか「御祝言、蝶花形は春姫の興入國入り……」といふ句などのあるに因んで「蝶花形」「島臺」の外題文字を据え、その上に柴田勝家の女大隅が父の辭世である「夏の夜の夢路はかなきあとの名を雲るにあげよ山郭公」の短冊を所持して岩國山で母の小谷の方に再會する（十冊目）條から「名歌」の文字を取入れて外題名を作つたものと思はれる。

秋は殊更もの淋し。千草にすだく蟲
ならで。ホシ葦子の釜の音澄みし。
敷居屋待合前裁の。路地と勝手忍び
足。隔て合うたる姉妹が。心も先へ
フシ飛石傳ひ。それと眞弓が姉妹か。
調オ、妹。爰へは何しに。エ、聞えた。

わしを出し抜き父上を。大内方へ味方
に付けうと思やるのか。さう言はしや
んすお前こそ。先へ廻つて久吉方へ。
勤める心でござんせう。エ、つべこべ
と口答へ。地そこ退きやらぬかと突退
けて行くも姉我意隔つる眞弓。邪魔し
やんなと振りほどく。風に屏風の柳腰。
帯際とつて引戻す。腕も。かよわき糸
薄亂す黒髪兩方が。掴み合うたる姉妹
喧嘩。争ふはずみ縁側へ。轉る拍子に
はつたりと。フシ思はず開く障子の内。
地閑を樂しむ晋近が。葦子にかり獨
服の濃茶の。フシ手前他念なく。調出
海。加藤が妻と言はるゝ身を以て。は
したなき振舞。さりながら。主家と思
ふの貞節。さのみは叱らぬ。仲直りは幸
ひ。姉妹仲も濃茶の盃。サ爰へ。
〳〵と機嫌よき。父の詞に葉末は差寄
り。調今四海一統に。久吉様へ従ふ時
節。理を非に曲けてお味方を。イエ
姉様まんがちな。申し父上。義廣様へお
味方せうとつい言うて下さんせ。ハテ
森しい。是非返答が聞き度くば。雙方
とも罷りならぬ。此上はそち達が持参
の品を改めよと。取出し渡す以前の
箱。心濟まねどめい。が。あたふた
明けて取出す。様子は何かしら布に。
調ムウけふの細布胸合はずと古歌の下
の句。手跡は夫正清殿。わたしが方は
コレ此の扇。ドレ。秋來月を見て
歸思多し。自ら籠を開いて白鵬を放つ。
ム、コリヤコレ。故郷をおもふ詩の
心。娘ども。篇と工夫を仕れ。アイ。
地とは言へど姉妹が。長夫の心しら
布とかけし扇の判じ物。解けぬ色目を
見て取る晋近。眞柴が招きに従はざ
る。男も聲も心々。けふ細布胸合はず
と。一家の縁も此の如く。断ち切る布
は離縁の印。エ、そんなら私は正清殿
に。オ、そちばかりでない妹も。故郷
を慕ふ詩を。扇面に書し送りし左衛
門。要をはづせし其の扇。親骨子骨は
ら。因を切つたる扇の去狀。
ハアはつとはかりに詞なく。目には涙
の。玉手箱。フシ明けて。悔しき思ひな
り。地時しも次より近習の武士。眞
柴家より使者として加藤正清。大内よ
り使者として出海左衛門宗貞。只今は
へと知らずれば。しをれし葉末も露
持つ心地。調オ、よい所へ夫の使者。
子仲なした夫婦合ひ。合點もさせず去

られた様子を。オ、さうでござんすと
ちや。オ、笹市殿の言はしやる通り。
も。私^{わたし}とても同じ事。お使者であらう
コレ餘所の小母様。祖父様へのお取次。
が此の恨み。頼むは姉様吞込んだと。
お頼み申し上げます。地と言合さねど
地初めの縫^{ぬい}れはどこへやら。解^{ほど}け合う
兩方が利發に困る母親も。フシ何と答
ては引締める帯も親身の。フシ姉妹思
も口ごもる。地一間に斯くと洩れ聞く
ひ。詞ヤ縁切れたれば。他人向。無
兵部。老の氣丈の長袴。左右に小太刀
禮の挨拶仕るな。地身も禮服に改めん
携へて作法。フシ亂さず歩み出で。詞
と。言ひつゝ立つて奥深く。入る間に
久しく對面せざる内。ハテ大人しく生
程もなが廊下。加藤虎之助正清と。親
立ちしな。娘が縁に引かれざる。小坂
の名をかる笹市が。まだ十才の腕白盛
部が性根を知り。縁を切つて孫どもを。
り。年も相生ふ松太郎。父左衛門と。是
使者に差越す發明々々。が若し。此の
も亦。オクリ名は芳しき梅檀のフシ實生。
祖父が承引せす。其の儘では歸られ
ゆゝしく打通れば。地思ひがけなき母
まい。篤と思案を定めよ。地と詞も持
と母。詞ヤ左衛門殿と思うたは松太
たず松太郎。詞この役口仕畢せねば。
郎か。ようおちやつたの。笹市も父様
生きて屋敷へ戻るなど。父様のお詞。
の御名代ちやの。長上下の著こなしふ
地と云ひつゝ手早に上下上著脱げば白
り。よう似合ふた事わいの。サア／＼
無垢麻上下。母は見るより。詞オ、さ
お使者の口上此の母へ。イエ／＼。父
け無うてはならぬ筈。大人も及ばぬ健
様と縁が切れた。お前は餘所の小母様
氣さを。眞似がなるならどなたでも。
郎が見えやしやんと聞けがしの。詞
も耳に當り障り。詞コレ妹。親の口から
子を賞めるは聞き難い。それ程の事し
かねる様な。笹市ではないわいの。ア
イ祖父様が味方に付いて下されずば。
死ぬる覺悟に極めて居ます。オ、さう
であろ／＼。早う用意。地と上下の。紐
を解くやらほどくやら。上著脱がせば
同じくも。フシ下は無紋の死出立。
見るよりはつとは思ひながら。詞オ、
出かしやつたなう。眞實極めたそなた
の覺悟。誰も口では立派に言へど。ま
さかになると臆病風。地出易いものと
初めの風。吹き戻されてコレ姉様。
臆病風とは誰がこと。儀によつては命
を惜しむ。松太郎ちやござんせぬ。ソ
リヤこちの子も同じ事。父上のお返事
次第。立派な覺悟見物しや。イヤ松太
郎が覺悟を見せう。見事そなたが。お

諸のせめ。藍君は船。〳。臣は水。

水よく船を。浮べ〳。て。臣よく君を。

仰ぐ御代とて返す〳。も。よき御代な

れや〳。萬歳の。道に歸りなん〳。

ナホス地 深手に弱る松太郎氣高の笹市ま

くり立て。止め刺さんと立寄るを。詞

ヤレ待て。勝負見届けたぞ。娘どもは手

負ひの介抱。早く。地 早くに母と母我身

をしづに東西の。掛金はづれ押明くる

としや遅しと駈入つて。我子々々に縋

りつき。詞オ、嬉しや笹市そなたは浅

疵。神や佛のお蔭ぞと地 姉は喜ぶ妹は。

手負ひにひしと抱き付きスエテ介抱おろ

か。泣叫ぶ。詞ヤア武士の家に育ちな

がら未練至極。笹市勝負に切り勝つ上

は。兵部晋近今日より。久吉公へ味方

ぞと。地 聞くにこそ。姉葉末お馬の

先の高名にも。勝つた手柄と賞めそや

す餘所の悦び子心に。聞くも無念さ松

太郎。詞エ、わしや負けたか口惜しい。

地 今一勝負と刀を杖。立上れどもよろ

〳〳〳。見る目に母は堪へ兼ねて。詞

オ、道理ちや〳。道理ちやわいなう。

地 武士の。意地とはいひながら。孫は

子よりも可愛いと世の謔もあるもの

を。見殺しにする片意地は。むごい無

情い父上と。恨みの數矢かぞへ立て。

いふも眞弓が子に迷ふ。悔みにいとど。

フシ苦しさの。地 引入る息氣を張詰め

て。詞ア、母様。祖父様に恨みはない。

地 負けたはわしが未熟から。大事の役

目を仕損じた。憎い奴ぢやと父様に。

叱られうかとそれが悲しい。もし尋ね

てなら笹市に負けはせぬ。詞怪我につ

らすは。骨肉の一子を殺す義者の潔白。

此上なしと思ひ寄りしも。義理といふ

二字が劍となつたるかや。月にも。花

産みの娘が産みの縁。分けて可愛い松

ば。ナウ何故の御最期と。右と左に姉

妹 スエ 取付き歎けば氣丈の手負ひ。眞

弓が顔を打眺めて。フシ涙を浮め。詞

オ、恨みは尤もさりながら。何をか包

まん。松太郎へ最前渡せし一腰はな。刃

引も同じなまくら物。さるに依つて笹

市が手疵は薄手。斯く計らひし一通り。

本意ならねと言ひ聞かさん。姉の葉末

は先立ちし。我兄元胤が忘れがたみ。

某とは生さぬ仲。同じ血の緒といひな

がら。義理ある孫の笹市が命を助け。

肉身の松太郎を殺せしは。指す敵加藤

正清に。縁を引いたる親左衛門。返り忠

もあらんかと。地 主家義廣の疑念を晴

らすは。骨肉の一子を殺す義者の潔白。

此上なしと思ひ寄りしも。義理といふ

二字が劍となつたるかや。月にも。花

産みの娘が産みの縁。分けて可愛い松

らば。粉骨盡し忠義を立てなば。草葉必勝の破竹の勢ひ。急ぎ御出馬然るべ
の蔭より悦ぶと傳へておくりやれ智殿しと。フシ申し捨てゝぞ引返す。地スハ
と。末期の一句孫娘。ナウコレ今が別一大事と左衛門宗貞。劣らぬ正清雙方
れかと歎けど更にその甲斐も。嵐が告が忍び装束脱捨つれば。肌には小具足
ぐる螺太鼓遠音にひびき。フシ物凄し。身をかため。勢ひ込んだる。フシ軍場の
地加藤が郎等木村和田藏。駆來つて大出立ち。地やをれ正清確かに聞け。久
音聲。詞大内が本城山口は要害堅固の吉樂殺が術をなすとも。味方は臥龍が
絶所なれば。地數日の對陣時を待ち計備へを立て。只一戦に追つ散らさん。
り知つたる海手より。足利慶覺西國へ。詞早く歸つて猿冠者が。首を堅固に用
下向と流布せし六字の旗。武器を隠せ心せよ。シヤ。案外なる非禮の過言。
し兵船に。押立てゝ押渡る。味方は山口如きの破れ城。正清先陣蒙らば一
指して三軍出でて行く。